

## 除草の風土〔5〕 ラオス中部の水田にみられる多様な草本植物

小坂康之（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）



第1図 水牛に畦畔の草を食ませているようす  
2003年9月7日、サワンナケート県パーク村にて筆者撮影。

田んぼの畔を歩いていると、一際目立つ花に出会った。ラン科ミズトンボ属の1種 *Habenaria rostellifera* である。野生ランの咲く田んぼにおける、人と植物との関わりを知りたいと思った。

ここラオス中部サワンナケート県の丘陵地には、広く水田が拓かれている。作型は水田の水条件によって異なり、丘陵部では雨季作が、平地や丘陵部でも湧水のある場所では雨季と乾季の二期作が、雨期に深く湛水する土地では減水期作がおこなわれる。雨期は5-10月、乾期は11-4月である。雨季作では、5月に耕起、6月に移植、10月から11月にかけて収穫、乾季作と減水期作では12月に耕起、1月に移植、3月から4月にかけて収穫する。この地域では、農薬はまだほとんど使用されていない。収量は、土質や肥料の投入量、天候によって大きく左右され、0.8t/haから2t/ha程度とされる<sup>1)</sup>。

最近ではトラクターを所有する世帯も増加してい

るが、水牛による耕起を行う世帯の方が多い。水牛は、稲の作付期間中には水田脇の草地や屋敷地周囲に繋がれ、前年度に収穫した稲藁を与えられる。そして収穫後には水田に放牧される。また作付期間中に、飼主に連れられて畦畔の草を食むこともある。第1図は、雨季盛期の午前10時頃に撮った水田風景である。中央奥の男性は、前日の大雨による増水の対策として水口を補修している。そして右の女性は、のんびりと草を食む水牛を紐で引いて畦畔の上を誘導し、途中立ち止まりながらゆっくりと移動している。図中央の畦畔では、草がほぼ一定の高さに食い込まれている。人手による畦畔の除草が行われていないことから、このような水牛の飼養法は、結果として除草の役割を果たしていると考えられる。

畦畔植物<sup>2)</sup>は、場所や季節によって大きく異なる。季節ごとに代表的な種を挙げると、雨季には *Adenosma* spp. (ゴマノハグサ科)、*Burmanna*



第2図 水田の畦に咲く *Habenaria rostelifera*

*coelestis* (ヒナノシャクジョウ科), *Chrysopogon aciculatus* (イネ科), *Cyperus* spp. (カヤツリグサ科), *Fimbristylis pauciflora* (カヤツリグサ科), *Lindernia* spp. (ゴマノハグサ科), *Murdannia* spp. (ツククサ科), ヌメリグサ (イネ科) など, そして乾季には *Coldenia procumbens* (ムラサキ科), *Grangea maderaspatana* (キク科) などが観察された。畦畔植物の中には, *Habenaria rostelifera* (第2図), *Kaempferia galanga* (ショウガ科) など, 開墾前の林地の残存種と考えられるものもある。また「Flora of Thailand」で希少種とされている, ナガバノイシモチソウ (モウセンゴケ科) や *Stylidium kunthii* (スチリジウム科) も確認された。

水田内の草本植生は, 主に水条件によって分類された。雨季にのみ湛水する水田では, 雨季にヒデリコ, タゴボウモドキ, キカシグサなど, そして乾季にトキンソウ (キク科), *Glinus oppositifolius* (ツルナ科) などが多く観察される。年間を通じて湛水している水田には, *Limnophila villifera* ssp. *gracilipes* (ゴマノハグサ科), ヤナギスブタ, コナギ, ノタヌキモなどが優占している。

調査を行った2カ村において除草の対象として認識されていた種は, わずか3種にすぎなかった。ヒデリコ, タゴボウモドキおよび *Limnophila villifera* ssp. *gracilipes* である。湧水の流れ込む水田では, 稲

の収穫後, *L. villifera* ssp. *gracilipes* が田面を覆いつくすことがある。そのような際, 犁がけの前に, クワを用いて数人がかりで田面を耕し除草を行う。そうしないと, 絨毯のように広がった同種の根によって犁がけが妨げられるという。ヒデリコとタゴボウモドキは, 時に稲の背丈を越えて高密度で生育することがある。しかし, 特に繁茂したときに手取りにより除草されるだけであり, 全く除草が行われない筆もある。Inamuraら<sup>3)</sup>は, ラオス中・北部における天水田のやせた土壌条件下では雑草の生育が悪いことを報告している。

一方, 水田の草本植物は, 直接的あるいは間接的に人々の生活に役立っている。*G. oppositifolius*, *Limnophila geoffrayi* (ゴマノハグサ科), ヤナギスブタ, コナギ, ナンゴクデンジソウなどは食用とされる。特に *L. geoffrayi* は, ラオスの最も一般的な家庭料理であるタケノコスープ (keng noomai) の材料として欠かせない。本種は雨季にしか生育しないため, 雨季に採集したものを乾燥保存して乾季にも用いるほどである。また, *Cyperus corymbosus* (カヤツリグサ科) と *Cyperus pilosus* (カヤツリグサ科) を用いたゴザ織を生業とする村もある。

年間の水田植生調査が終わりに近づいた頃, 収穫後の田んぼ一面に *Xyris indica* (トウエンソウ科) が咲きそろっていた。一緒にいた村人は, 黄色いお花畑を前にして, 「ゲーム・ノー」(綺麗だなあ) とつぶやいた。日本の春, 田起こし前の田んぼに広がるゲンゲやスズメノテッポウを眺めるような感覚なのだろうか。

#### 引用文献

- 1) 小坂康之 2003. ラオス農村の水田と幸の数々. アジア・アフリカ地域研究 3, 277-282.
- 2) 山口裕文・梅本信也 1996. 水田畦畔の類型と畦畔植物の資源学的意義. 雑草研究 41, 286-294.
- 3) Inamura, T., S. Miyagawa, O. Singvilay, N. Sipaseauth and Y. Kono 2003. Competition between weeds and wet season transplanted paddy rice for nitrogen use, growth and yield in the central and northern regions of Laos. Weed Biology and Management 3, 213-221.